

青森県近代文学館報

特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」

会期 平成二十七年七月十八日(土)～九月二十三日(水)

平成27年で戦後70年を迎える日本。青森県近代文学館では、特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」を開催します。

昭和6年、満州事変が勃発し、日本は戦争への道を歩き出します。青森県出身・在住の文学者たちも大勢が時代の波に翻弄されました。

榎本健一が率いるピエル・ブリアントで活躍した劇作家の菊谷栄は、一座に見送られて出征し、昭和12年に中国の河郭鎮で戦死。従軍中だった「東奥日報」記者の竹内俊吉は「菊谷栄君の戦死」の文章を寄せ、その死を悼みました。

北村小松は昭和13年秋、海軍従軍作家として漢口攻略戦に参加。軍部から協力を求められ、翌年には雑誌「キング」に「燃ゆる大空」を連載しました。太平洋戦争中は海軍報道班員として南方諸島に赴いています。

石坂洋次郎は昭和16年から翌17年にかけて、陸軍宣伝班員としてフィリピンに従軍。帰還後「婦人之友」に「マヨンの煙」を連載しますが、再び微用となり中断を余儀なくされました。

今官一は昭和19年に召集され、横須賀海兵団に入団。戦艦長門に乗り、レイテ沖海戦を経験しました。ポケットにノートを忍ばせ克明に記録し、その体験を戦後の創作に生かしています。

太宰治は日本文学報国会からの要請により「惜別」を執筆。また、防空壕での体験を基に「お伽草紙」を生み出し、昭和20年7月、郷里に疎開しました。

戦後70年を機に、青森の文学者たちが戦前・戦中をどのように生きたのか振り返り、文学が持つ力の大きさに光を当てる特別展です。



写真 北村小松『火』上巻表紙
(昭和17年7月、東京日日新聞社刊)

目次

・特別展「青森の文学者たちの戦前・戦中」……	1
・特別展「三浦哲郎」開催報告……	2
・「三浦哲郎の俳句」米田省三……	2
・「三浦文学の魅力」福村忠夫……	3
・企画展「棟方志功と青森の文学」開催報告……	4
・「志功が愛した青森の文学者」長部日出雄……	5
・企画展「成田千空」開催報告……	6

平成二十七年度企画展

【企画展】戦後「青森文学と青森の復興」
会期 10月24日(土)～12月13日(日)

昭和20年7月28日深夜、青森市に焼夷弾の雨が振り注ぎました。東北最大の被害をもたらしたとも言われる青森大空襲です。僅か二週間後に終戦を迎えますが、長期にわたる戦争による痛みは深く、人々は疲弊しきっていました。その中、いち早く文学活動を再開し、華々しい活躍をみせた本県出身作家たち。また青森の地では、文芸誌の復刊や創刊によって青森の「文芸復興」は本格化していきます。焦土から立ち上がる青森の姿を、文学の復興を通して紹介します。

【企画展】「本はもう一人のわたし」児童文学者・鈴木喜代春
会期 1月30日(土)～4月10日(日)

大正14年、南津軽郡田舎館村に生まれた鈴木喜代春は、昭和20年に青森師範学校卒業後、黒石市内の小学校で教鞭をとり、29年からは千葉県内の小・中学校に勤務。在職中より児童文学作品を執筆し、63年『津軽の山歌物語』で第12回日本児童文芸家協会賞を受賞しました。故郷青森を舞台にした作品、歴史上の人物、大地に生きる人々、学校や子どもたちの生活を描い

・「開館20年記念 青森県近代文学館名品展」開催報告……	7
・全国文学館協議会 共同展示……	7
・注目の作家コーナー、スポット展示……	8
・第十三回青森県近代文学館川柳大会開催報告……	8
・資料寄贈者紹介……	9
・朗読会、館務日誌……	12

た作品を数多く発表し、平成26年には200冊目の著書となる『女性小学校長 関よねものがたり』を刊行しています。青森県を代表する児童文学者・鈴木喜代春の業績を紹介します。

資料集第九輯 北畠八穂草稿

「『ホイ』ってあの返事。』完成 この草稿は、北畠八穂の死後、遺族から当館に寄贈されたもので、八穂が作家デビューする以前の作品草稿と見られます。一枚目が欠如しておりタイトルが不明なため、資料集として刊行するにあたり「書き出し」を仮のタイトルとしました。現存する126枚の写真を掲載して、翻刻を施しています。解説は佐藤幸子氏(元青森県近代文学館文学資料調査員)によるものです。

エクステンド常設展

常設展示替え
6月～12月・12月

来年度、常設展が大きく変わります。現在展示中の13人の作家たちから毎回二人を取り上げ、拡大して展示し、蔵書点検期間で入替をします。第一回目となる今年6月からは太宰治と寺山修司の展示をします。いつもの展示ケースから飛び出した太宰と寺山の展示に御期待ください。多数の御来館をお待ちしています。

特別展「三浦哲郎」開催報告

平成26年7月12日(土)から9月7日(日)まで特別展「三浦哲郎」を開催しました。

この特別展は、当館における三浦先生の単独展としては、平成12年に開催した特別展「三浦哲郎芥川賞受賞40年記念展」に続く二度目の展覧会で、県内外から四、五〇〇人を超える方に御来館いただきました。芥川賞受賞作「忍ぶ川」の志乃のモデルである徳子夫人、三浦先生の幼なじみ立花義康氏夫人京子様をはじめ、三浦哲郎文学顕彰協議会、三浦先生の御友人、親交のあった方々、八戸市、八戸市内の高校・中学校、研究者の方、三浦文学を愛する方々の多大なる御協力を得て、展示資料点数370点を数える展覧会となりました。

今回の特別展で印象的だったのは、普段は少ない県南からの来館者の方が多かったことです。県外から来館された方も多く、この特別展のため、わざわざ関西圏からおいでになったという方もいらっしゃいました。何時間もかけて原稿や遺品、解説パネルをじっくりと御覧になる方が非常に多く、根強い「三浦ファン」の存在を実感しました。



特別展記念文学講座

文学講座1

平成26年7月27日(日)

青森県総合社会教育センター大研修室

参加者68名

講演：「私小説の新しさ」

——三浦哲郎の文学——

富岡幸一郎(鎌倉文学館館長)

朗読：朗読で味わう三浦

文学「忍ぶ川」ほか

鳴海征子(元青森放送アナウンサー)

文学講座2

文学講座2

平成26年8月17日(日)

青森県立図書館 4階

集会室

講演：「短篇小説——三浦文学の魅力」

森林 康(三浦哲郎文学顕彰協議会副会長・元八戸市教育委員会教育長)

対談：「文学ビデオ『忍ぶ川』の舞台をたずねて」

——撮影同行秘話——

米田省三(青森県近代文学館元室長・十和田市教育委員会教育長)

米田省三(青森県近代文学館元室長・青森県立板柳高等学校校長)

サトウユウジ(写真家)

(伊藤文一、青森県近代文学館総括主幹)

講演：「私小説の新しさ」

——三浦哲郎の文学——

富岡幸一郎(鎌倉文学館館長)

朗読：朗読で味わう三浦

文学「忍ぶ川」ほか

三浦哲郎の俳句

米田 省三

平成八年に青森県近代文学館で、「十和田湖をめぐる近代文学」というタイトルで特別展を開催したことがあった。この地域を訪れて作品化した詩歌、小説、紀行文、随筆等万般にわたり、県内外の作者のものを紹介したが、その中で、三浦哲郎氏の俳句も紹介した。これは、展示作品を調査中、たまたま十和田湖休屋のあるホテルで発見しお借りしたものであった。後日のことになるが、この俳句についてお尋ねしたところ、記憶にないというようなことを言っておられた。ところが、昨年四月、三浦氏と「非情」時代以来の親友である竹岡準之助氏が出された『白夜の忌——三浦哲郎と私』という著作を拝見して驚いた。「二つの仕事」というタイトルの文章の中で、要約すると、ある雑誌の取材旅行にカメラマンとして三浦氏に同行したが、十和田湖畔の宿に一泊したときのこと、宿の女将が色紙を何枚かもってきて揮毫を依頼した。三浦氏はちよつと戸惑った様子で、十和田湖を訪ねた印象を七五調でぎこちなく筆にしていた。そこで竹岡氏は助け船を出し「解禁の姫鱒ありて今日の膳」という句を作ってみせたら、三浦氏は「よし、それもちょうど」と色紙に書いたというのである。私が、休屋のホテルで見せてもらったのは、実にこのときの句であった。ただし、色紙ではなく短冊であり、句も「解禁の姫鱒ありて今朝の膳」と少し異動があった。それにしてもこれが竹岡氏の句であったとは。三

浦氏が、記憶にないと言わざるを得なかったのも理解できる。休屋のホテルでは、もう一枚短冊を見せていただいたが、こちらも竹岡氏の手が入っているのか、機会があったらご教示いただきたい。「嶺に雪水辺は緑蟬の声」という句である。

ところで、私が休屋のホテルで「哲郎」という書名のある短冊を見せられたとき、三浦氏のものであらうと判断した理由は、短篇の名手としての三浦氏の文業を慮ったことであつた。氏には、「一尾の鮎」という随筆があるが、その中で、「できれば鮎のような姿の作品が書きたい。無駄な装飾のない、簡潔で、すっきりとした作品。小粒でも早瀬に押し流されない力を秘めている作品。素朴ながら時折ひらと身を躍らせて見る人の目に銀鱗の残像を留めるような作品」と記し、モーツァルトの言葉として、「充分に表現するために、けつして表現しすぎないこと。しかもそれでいて完全に表現すること。ただし、ごくわずかの言葉で表現すること」を引用している。これは俳句にも通じるものであり、三浦氏が俳句をものしても不思議はないと判断したからである。ちなみに三浦氏は俳人飯田龍太氏とは長いつきあひがある。あるいは龍太氏から俳句のコツを伝授されていたかもしれない。(紺緋の句から)という一文には、「私は、俳句は作らないが」と記しているが。(まいた・しょうぞう 日本近代文学会会員)

三浦文学の魅力

私達が文章を読むとき、視線は当然字面を追って行くわけだが、これは単に視覚だけで読んでいるとはいえず、むしろ自分の好きな速度で、快い声で音読して、その音を無意識に聞いているような面がある。朗読による氣息とは違って、頭の中から中かで、たしかに文章を聞くようにして理解している。その証拠に、文章の緩急に伴って私達の方もストレートに反応する。作者が切迫した息づかいで書くと、私達も切迫感をもち、作者がのびやかに書いていけば、私達も悠々としてふだんの呼吸のままに読み継いで行く。つまり、文章には、呼吸と直結する「息づかい」がある。

読んで快い文章、意味が滑らかに頭に入る文章、歯切れよく突っ込みの鋭い文章ほど胸のすくものはない。それには言葉の選び方がどうしても問題になる。作者は、多くの言葉の中から最も的確な言葉を選択する。さらに、言葉からできる限り余剰を排除する。簡潔で、的確な表現は作者の心のみならず、私達読者の心に響き、快適な状態にしてくれる。

三浦哲郎は、よくこう述べる。「文章はとにかくしつかり書き、小説は文章だ。」「小説は、読者の気持ちに付度して、優しく語りかけるように書く。」と。では、三浦は実際、どうい

う小説作法をめざそうとしたのか。それは、書き言葉の裏面に、作者自身の語り言葉の響きを吹き込む方法である。

一つは、小説の素材を母親の「歌うような問わず語り」に求め、表現したこと。二つめは、登場人物を作者と同郷の者とし、親近感を持って寄り添い、彼等の発する方言の語尾を清音に変えて、語調を柔らげたこと。三つめは、書き出しに工夫したこと。例えば、冒頭部に聴覚的表現を据え、読者の聴覚に訴えたこと。四つめは、話体の中に重要語を一つ登場させ、その語から派生する内容を、次から次へと滑らかにリンクさせて、全体の構成として見れば、一本調子ではなく、プロットに富んだ(ストーリー性のある)変化を出したこと。漢詩でいう「起承転結」あるいは謡曲でいう「序破急」のような文章全体の緩急強弱や、時間の遡及による場面の転移などから生まれる律という、音楽性を感じさせること。

その他としては、漸層法による畳み掛け、句読点の付け具合、文章の終止表現、落語噺風の表現、ユーモアが醸し出す軽やかな空気、逆接の接続助詞「しかし」の使用を控えて、話し言葉の「けれども」「けれど」に書き換える、など。

これらには、三浦作者自身の語り言

福村 忠夫

葉による呼吸、息づかいが存在したことに注意してほしい。そして、三浦が「読者に語りかけるような気持ちで書く」という眼目は、まさに言葉の音の響きや律を重視していたからである。

言葉の響きの快さ、修辭上の工夫、文章の流れ具合といった本来、口語文において重視されるものを大切に|現代の文学は口語体から離れつつあるのはまちがいない|その点でも、三浦哲郎の文学は、品位と格調のある正統的な文学といえるだろう。

紙幅の関係で具体的に作品をあげて説明できなかったことをお詫びしたい。また、本稿は、尾崎左永子氏著『エッセイの書き方』(平成十一年二月岩波書店刊)を参照させていただいた。(ふくむらただお・三浦哲郎文学研究家)



パネル展開催

特別展「三浦哲郎」をはじめ、地域の施設・学校・諸団体等の協力を得て開催いたします。会場・期間は次のとおりです。

- ◇「三浦哲郎」パネル展
 - 五戸高等学校 10月8日～14日
 - ポータルミュージアムはつち(高総文祭文芸部門) 10月24日～26日
- 名久井農業高等学校 11月1日～2日
- 田名部高等学校 11月4日～11日
- 五所川原工業高等学校 11月4日～11日
- 八戸東高等学校 11月12日～18日
- 黒石高等学校 11月19日～11月25日
- 青森西高等学校 11月26日～12月2日
- ◇「斗南藩と文学」パネル展
 - 横浜町ふれあいセンターホール 5月1日～25日
 - むつ来さまい館 7月1日～31日
- ◇「寺山修司没後30年」パネル展
 - 八戸高等学校 7月9日～13日
 - 三沢高等学校 7月19日～20日
- ◇「榎方志功と青森の文学」パネル展
 - 青森高等学校 7月13日
 - ワ・ラッセ(青森市) 9月20日～11月23日
- ◇「太宰治生誕100年」パネル展
 - 岩木高等学校 7月19日～20日
- 横浜町ふれあいセンターホール
 - 7月23日～8月21日
 - 10月18日～19日
- ◇「青森県ゆかりの作家つながり展」
 - 青森南高等学校 7月19日～20日
- ◇「大町桂月が描いた青森」パネル展
 - ふかうら文学館 7月10日～8月10日
 - 10月23日～9月21日
- ◇「鳴海要吉没後50年」パネル展
 - 十和田市教育委員会 8月23日～31日
 - むつ来さまい館 8月5日～31日
- 横浜町ふれあいセンターホール
 - 2月17日～3月19日
- ◇「青森県近代文学館・名作展」パネル展
 - ポータルミュージアムはつち(八戸市・高総文祭文芸部門) 8月23日～9月23日
 - 10月24日～10月26日
- ◇「青森県近代詩のあゆみ」パネル展
 - 横浜町ふれあいセンターホール 10月25日～11月11日

企画展「棟方志功と青森の文学」開催報告

企画展「棟方志功と青森の文学」を、4月26日(土)から6月8日(日)まで開催しました。次ページの文章は、長部日出雄氏が本展のために、パネル原稿として書き下ろしてくださったものです。この度、御快諾を得て再掲することができました。

作品の中に言葉を積極的に取り入れた版画家、棟方志功(一九〇三―一九七五、青森市出身)は、生涯を通じて多くの文人と交流し、その中には青森県出身者が少なくありませんでした。本展では、棟方志功と青森の文学の関わりについて光を当てるべく、計一六六点の資料を展示しました。以下、構成や概容について記します。

序盤では、志功の生涯や文学全般との関わりについて大まかに紹介しました。『板散華』や『板極道』等、志功のエッセイ集6冊のほか、谷崎潤一郎宛昭和31年3月8日付書簡を展示しました。



志功作品が表紙となった「県政のあゆみ」

中盤では、志功と関わりの深かった青森県出身の文学者、13名を紹介。志功との接点に分かる引用文や写真を組み合わせたパネルを掲げ、その周辺に関連資料を配置しました。

この流れの中で、福士幸次郎の詠歌と後ろ姿が彫り込まれた「ゴッホの柳の柵」(棟方志功記念館蔵)、高木恭造著『まるめろ』の装幀原画、葛西善蔵の詠歌を板画化した「哀父頌」四柵、津川武一著『生けるしるし』の装幀原画を紹介。また、津川武一や鳴海完造、菊岡久利、伴史郎に宛てた書簡計17通を公開しました。

終盤では、志功の自作短歌が彫り込まれた作品として「玫瑰(はまなす)の柵」「沢瀉風(おもだかかぜ)の柵」(いずれも棟方志功記念館蔵)を展示。また「青森版画」の題字や表紙絵等、初公開資料のコーナーを設けました。青森県内に存在する志功ゆかりの碑六基については、パネルで紹介しました。

このほか展示室中央には、志功が装幀を手掛けた本県ゆかりの図書雑誌を集めました。その数は30を超えました。

展示の準備を通して実感できたのは、棟方志功は青森の文学を愛し、陰で支え続けた人物だったということです。会期中に二、三六八人の方が足を運んでくださいました。5月11日には日曜講座「志功が愛した青森の文人」(担当竹浪)を開催しました。

初公開資料紹介

本展における初公開資料について詳しく紹介します。いずれも鈴木廣氏が代表を務める青森県版画会から御寄贈いただいたものです。



・「青森版画」題字と表紙絵

「青森版画」は青森県版画会の創設者、佐藤米次郎によって昭和14年に創刊された版画誌です。志功の装画を得てスタートし、2号で廃刊となりました。が、長い休止を経て昭和30年に復刊しました。数十年にわたり編集を担当したのは加藤武夫です。さらに昭和49年4月には、志功から新たな表紙絵の提供がありました。このときの「二女人の顔」の絵が、今日に至るまで、継続して用いられています。平成25年2月発行の「青森版画」第一一一号とともに展示しました。

・「善知鳥(うとう)」題字と表紙絵

昭和49年、「青森版画」の姉妹版画誌の発行が企画され、編集担当となった鈴木廣氏は、志功に命名を依頼しました。10月18日の渡米を目前に控えていたにもかかわらず、志功は大変喜び、「善知鳥」の題字三種類と表紙絵を書き贈ってくれたそうです。題字は原稿用紙の裏側に揮毫され、余白は次のようなメッセージで埋め尽くされていました。

「青森板画誌の別冊「善知鳥」の表紙と文字を記してみました。よろしかったら使ってください(中略)この三種の文字どれでもまた位置も縦も横も大きさも自在にしてください。」

おそらく棟方志功は、器用ではないもののサービスピ精神が旺盛で、人一倍気遣いの深い人物だったのだと思われます。志功の手柄が滲み出た資料であり、まさに本企画展における目玉的存在でした。



志功が愛した青森の文学者

棟方志功は非常に詩歌を愛し、暗誦した詩句の文字をそのまま版画化することで、前人未踏の作風（スタイル）を生み出した板画家である。

代表例が出世作となった『大和し美（うるわ）』で、これは佐藤一英（いちえい）の長篇物語詩の約二千の文字で横に連ねた二十枚の画面を埋め尽すという——他に誰も考えつく筈のない画期的な大作であった。

郷土青森の文学者で志功が尊敬した小説家 葛西善蔵と詩人 福士幸次郎の歌を画面に彫り込んだのが、『哀父頌（あいふしょう）』と『青春（もえはる）の柵（さく）』である。

『哀父頌』には 葛西善蔵の「白根山雲の海原夕焼けて妻し思へば胸痛むなり」と「都なれば花も桜も夕月夜ゆう子そぞろに父も酔ひしか」ほか二首、『青春の柵』は福士幸次郎の「青女子（あおなご）の村のはづれの古沼に春開けて萌ゆゴッホの柳」という歌が彫られている。

極めて健康的な芸術家であった棟方志功が、破滅的な私小説家の葛西善蔵に惹かれたのは不思議とも感じられるが、父幸吉の存在を知れば謎が解ける。鍛冶屋の父幸吉は、作った鎌の鋭い切れ味が無類と称される程の名人だった。

たのだが、注文の主流が刃物鍛冶から馬車や荷車等の鉄の部分を作る車鍛冶に変った時代にうまく適応できず、その鬱屈から酒でわが身を滅ぼすような後半生を送った。その父の姿に、志功は善蔵の私小説の主人公を重ねていたのだらう。

それに比べれば、福士幸次郎に対する敬愛はずっと解り易い。棟方板画の形成には、

「私は太陽の子である、
未だ燃えるだけ燃えたことのない
太陽の子である。」

と歌ったこの向日的な詩人の影響が、大きな推進力になっていた。福士幸次郎は、関東大震災に遭った大正十二年の暮れに、東京から郷里の津軽に帰って来て、翌年一月の東奥日報に「地方文化運動」というエッセイを発表し、地方主義を基調とする文化運動を始めた（高木恭造の方言詩集『まるめろ』はその優れた成果の一つである）。同じ時期、志功は逆に帝展を目ざして東京へ出て行こうと懸命になつていたので、その地方主義論にさほど心を惹かれたとはおもえない。

志功が強く惹かれたのは、『鍛冶屋

長部 日出雄

のポカンさん』を読んだ時からであつたらう。

「この息子はポカンさん、とんてんかんと泣く相鎚（あいづち）に、母の初生（はつなり）が食べたいと、鉄礮台（かなしきだい）をたたくとき、手をあつあつとほてらして叩くとさ。」

という詩句に、父幸吉の相鎚を打つていた少年期の自分の姿を見なかった筈がない。

そして前記の詩『私は太陽の子である』は、志功を感奮興起させずにおかなかったらう。前に引いた詩句の後に「今口火をつけられてゐる、そろそろ燵（くす）ぶりがかけてゐる。」と続いて、最後に「私は暗い水ぼったいじめじめした所から産声をあげたけれども、私は太陽の子である、燃える事を懂（あ）こがれてやまない太陽の子である。」と結ばれる詩は、まるで自分の心を歌っているように感じられた筈だ。

昭和八年の二月、福士幸次郎の巻頭



企画展「棟方志功と青森の文学」ポスター



「長部日出雄と棟方志功」のコーナー

論文「日本語の文学語としての進化」を読むために雑誌「新詩論」の第二輯を手にとったことが、志功の開運を決定した。

同じ号に佐藤一英の『大和し美』が載っていたのである。人並み外れて詩歌を愛する志功は読んで、内容と韻律の素晴らしさに大感激したのだが、しかし長篇の物語詩の文字をそのまま板画にできるなどとはまだおもひも寄らぬことであつた。

その後、歌人で書家の會津八一と知り合い、中国には書と画を同じものとする「書画一致」という思想があると教えられておもしろいとき、愛する詩句の約二千の文字を無我夢中になつて彫り進んだことが、志功を「世界のムナカタ」にする道を開いたのである。

企画展「成田千空」開催報告

平成26年10月11日から11月24日まで、企画展「成田千空」を開催しました。本展は成田千空が俳句をはじめの契機となった時代の資料から、亡くなるまでの作品と業績を四章立てで紹介する回顧展で、資料点数二二七点、二、七九二人に御来館いただきました。御遺族をはじめ、千空と交流のあった方々、青森工業高校、五所川原市、深浦町、外ヶ浜町等の御協力をいただきました。会期中の11月17日は千空忌にあたり、青森市出身のデザイナー・乗田菜々美氏デザインの千空俳画をあらわした「しきしおり」をスタンプリーの景品として配布し、好評をいただきました。11月9日の日曜講座「成田千空の生涯と作品（担当西谷）」には64人の方に足を運んでいただきました。



成田千空（一九二一—二〇〇七）は青森市出身の俳人です。昭和63年句集『人日』で俳人協会賞、平成10年には句集『白光』で県人初の蛇笏賞を受賞しました。昭和63年「萬緑」の選者となり、亡くなるまで代表として活躍しますが、五所川原で暮らしながら活動するスタイルを貫き「東北に千空あり」と称えられました。



蛇笏賞副賞（成田市子氏蔵）

一、千空俳句の礎

青森工業学校時代に校友会新聞「青工」に散文や詩を掲載されており、俳句ではないけれども、当時から文章を書くことに熱心だったことが伺えます。昭和16年に俳句をはじめた千空は、昭和17年「月刊東奥」九月十一日號の俳句コーナー（太田耳動子選）で一位に選ばれた他、方言詩（二戸玲太郎選）コーナーで入選を果たしています。影響を受けた人物には俳人の他棟方志

功や太宰治もいました。太宰の『津軽』は特に思い入れがあり、太宰の死後、津軽半島を旅し、太宰と同じ竜飛の「奥谷旅館」に宿泊して、初の群作「玫瑰紀行」を作り、発表しました。本展では、当時の宿帳（外ヶ浜町蔵）の画像や「玫瑰紀行」掲載の「暖鳥」も展示しました。

二、「暖鳥」時代

終戦後間もない昭和21年2月創刊の「暖鳥」は薄かったけれども、毎月欠けなく発行され、県内で最も注目された俳誌となりました。同人の中ではかなりの若手だった千空ですが、昭和28年には選者となりました。その頃熱心に投句をしていたのが青森高校三年の寺山修司です。本展では当時の「暖鳥」から、選者として、また、俳句界の先輩として、若き日の寺山にアドバイスをした様子を展示しました。また、新谷ひろし氏に「暖鳥」と千空さんへを御寄稿いただき、パネル展示しました。

三、「萬緑」時代

昭和21年10月、中村草田男主宰「萬緑」に創刊号から参加します。はじめ句が巻頭句として掲載された昭和22年の11月号で、草田男は、一度もあつたことのない千空を絶賛しています。その後も千空は草田男期待の「萬緑人」として句作に励み、第一回萬緑賞を受賞します。千空も草田男を生涯の師と仰ぎます。その関係を句碑建立や

第一回みなづき賞の受賞などで御覧いただきました。また、福士光生氏にバネル原稿「萬緑」と千空さんへを御寄稿いただきました。

四、五所川原と千空

千空は中央から再三の要請にもかかわらず、生涯五所川原に住み続け、そこから作品を生み続けました。遺品や各賞の賞状・副賞を展示した他、青森文芸協会や五所川原俳句会、五能沿線俳句会などの活動の記録を展示し、五所川原の文芸活動の中の千空を浮かび上がらせました。また、立佞武多「陰陽師」が文学館ロビーに設置され、展示に花を添えました。

立佞武多「陰陽師」
（立佞武多の館より借用）

展示解説

（西谷ともえ、青森県近代文学館主査）

「開館20年記念 青森県近代文学館名品展」開催報告

平成27年1月17日(土)から3月15日(日)まで、「開館20年記念 青森県近代文学館名品展」を開催しました。

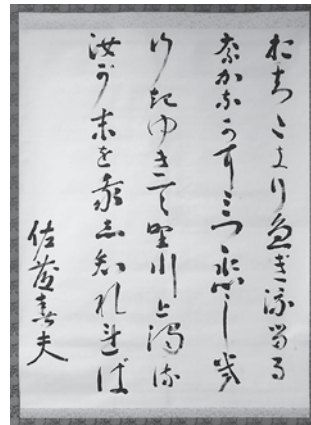
当館は平成6年3月22日に開館し、今年度で開館20年を迎えました。これを記念し、本展では、与謝野寛・晶子が短歌を散らし書した屏風、芥川の短冊、漱石の句幅など、今まで展示する機会にあまり恵まれなかった「知られざる名品」と、これまでの展示で特に注目された、太宰治愛用の万年筆をはじめとする作家たちの遺品や自筆原稿・書画など、展示を彩った名品の数々を展示し、青森県近代文学館の20年の歴史を振り返りました。総資料点数一三三点、3月8日には、開館時の室長で現在弘前市立郷土文学館企画研究専門官の館田勝弘氏による日曜講座「青森県近代文学館の名品」を開催しました。

◆「知られざる名品」佐藤春夫詩幅

「おちたぎり急ぎ流るる／なかなかにみつ、悲しき／行きゆきて野川と濁る／汝が末を我し知れば」

詩人、佐藤春夫は昭和26年6月30日、作詞を担当した青森県立三本木高等学校の校歌制定発表式に出席するため来県、その後、奥入瀬、十和田湖、蕨、恐山、種差などを巡りました。「奥入瀬谿谷の賦」はその時の印象を歌ったもので、同年9月「三田文学」

に発表されました。「瀬に入り淵に咽びつつ／奥入瀬の水歌ふなり／しばし木陰に佇みて／耳かたむけよ旅人よ」から始まる四行九連の詩ですが、「反歌」である「おちたぎり」の部分当初はありませんでした。



昭和28年10月、十和田八幡平国立公園指定十五周年を記念して、奥入瀬流の銚子大滝そばに佐藤春夫詩碑が建立され、この「おちたぎり」の詩句が奥入瀬の天然石に刻まれました。轟々と落下する銚子大滝の清冽な水が、やがては野川となり濁りゆく悲しさを歌った詩です。

春夫の没後、序に「一九六一年夏日」と記された自筆の未刊行詩集『春夫詩存』が発見されました。その中で「おちたぎり」の詩句は、「奥入瀬谿谷の賦」の最後に「反歌 銚子大瀧」として盛り込まれており、講談社『佐藤春夫全集』第一巻に収録されました。

◆「展示を彩った名品」

「太宰治遺品」

エヴァーシャープの万年筆

美知子夫人は、書齋にまつわる遺品の中で「愛用の品」と呼べるのは、太宰が夜店で買った鋳物の灰皿とアメリカ製のエヴァーシャープの万年筆の二つだと書いています。

この万年筆はもとと美知子夫人がアメリカ土産にもらった品でしたが、いつからか太宰が使うようになったそうです。軸は途中で破損したので取り替え、その都度インクをつけて書いていましたが、軽く字を書く癖があった太宰は、昭和14年頃から最期まで、この万年筆一本で執筆を続けることができたようです。身辺に必需品だけを置いて簡素に暮らすことを好んだ太宰の数少ない愛用の品の一つです。



全国文学館協議会 共同展示

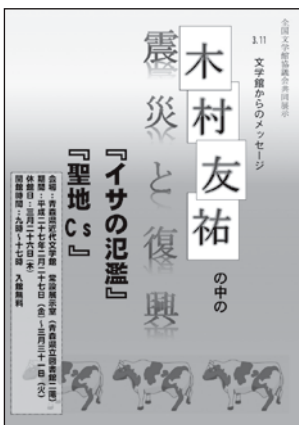
「3・11 文学館からのメッセージ」

木村友祐の中の震災と復興『イサの氾濫』『聖地Cs』

平成27年2月27日(金)～3月31日(火)

本展は、全国文学館協議会加盟館中の25館が、「3・11 文学館からのメッセージ」という共通のテーマにより、各館の持ち味を生かした展示を一斉に開催するもので、今年で3回目の開催となります。当館では八戸市出身で、平成21年、故郷の南部弁を駆使した「海猫ツリーハウス」ですばる文学賞を受賞した作家木村友祐(一九七〇)の『イサの氾濫』『聖地Cs』を取り上げました。

東日本大震災と、その後の原発事故の影響に、東北の人間として悔しさを感じて書いた『イサの氾濫』(三島由紀夫文学賞候補)、原発事故後殺処分されるはずだった牛たちを「切り捨てられる者」の仲間として描いた『聖地Cs』(野間文芸新人賞候補)関連の書籍、雑誌の他、木村友祐本人の協力を得て、創作ノートや書き下ろしのメッセージ、写真なども展示しました。



注目の作家

寺山修司の生涯のパートナーとして数々の演劇や映画などのプロデュースを行った女優、九條今日子の訃報に接し、6月からの注目の作家コーナーのテーマは「追悼 九條今日子」といたしました。当館でも寺山修司資料の御寄贈だけでなく、講座や御寄稿など大変お世話になりました。展示を通して故人の冥福を祈ると共に、寺山修司の残された偉業に九條今日子の名を改めて刻印したいという思いを込めた展示といたしました。

4月下旬 高松玉麗

『青森県句集』50輯・俳誌「寂光」592号を生み出した俳人

4月上旬～6月下旬 下澤木鉢郎

酒と旅を愛した画家・版画家・俳人

4月下旬～7月下旬 関野準一郎

銅版画、木版画、美術評論、エッセイで活躍の鬼才

6月下旬～9月下旬 追悼 九條今日子

寺山修司・生涯のパートナー

7月下旬～10月下旬 村次郎

幻の詩人

9月下旬～1月上旬 成田夜雨

明治から昭和まで弘前俳壇をリード！

10月下旬～2月下旬 桜井哲夫

ハンセン病の苦しみから紡ぎ出された珠玉の詩

1月上旬～2月下旬 安岡章太郎

弘前で少年期を過ごした芥川賞受賞作家

2月下旬～ 鈴木喜代春

本を読んでキラキラ
青森県を代表する児童文学者



「追悼 九條今日子」



「関野準一郎」

第十三回青森県近代文学館 川柳大会開催報告

3月1日(日)、第13回青森県近代文学館川柳大会を県立図書館集会所で開催いたしました。今回の宿題は「スマホ」「きらきら」「迷う」「指」、当日発表の席題は「後藤蝶五郎の句幅」でした。田沢恒坊氏による「東奥文芸叢書こぼれ話」と題した講演、又柳誌の展示・交換会も行われ、参加者89名を数える盛会となりました。

大会の特選句は以下の通りです。

席題「後藤蝶五郎の句幅」岩崎眞里子選

合掌をひらくとうすずみの桜

野沢省悟

席題「後藤蝶五郎の句幅」尾形せいじ選

まなうらに浮かぶ佳き日々佳き景色

葉閑女

宿題「スマホ」斎藤あまね選

一斉にスマホが歩く交差点

白川 莫

宿題「スマホ」須藤しんのすけ選

被告人スマホを持って二歩前へ

柳谷たかお

宿題「きらきら」大黒谷サチエ選

濁点が付けば数倍光ります

澤田正司

宿題「きらきら」井上健蔵選

日溜まりに置かれた献体のカルテ

千島鉄男

宿題「迷う」熊谷冬鼓選

箆は鍋に鍋はやかに嫉妬した

井上健蔵

宿題「迷う」野呂吞舟選

迷っても迷ってもまた朝がくる

三浦ひとは

宿題「指」千田和美選

小指にはいつも切ない過去がある

白川 莫

宿題「指」森雄岳選

橋の向こうにしょんぼり立っている小指

松山芳生

スポット展示開催

貴重であるが故に展示機会の少ない資料を期間限定で公開するスポット展示。今年度は左記の通り開催いたしました。今回は、新収蔵資料として、太宰治資料「小館善四郎宛封書(昭和11年8月7日推定・全集未収録)」「句帖『亀の子』(小館善四郎旧蔵)」佐藤紅緑の短冊等を展示しました。

太宰治 新収蔵の書と写真

6月14日(土)～7月1日(火)

佐藤紅緑「句と筆蹟」

9月13日(土)～9月30日(火)

北村小松 コマツの青春

12月6日(土)～12月24日(水)



佐藤紅緑
～句と筆蹟～
展示風景



初公開
北村小松 自筆訳本
「星よ、マリオンよ」

資料寄贈者紹介

◇次の方々から資料を寄贈していただきました。誠にありがとうございます。今後とも当館への御支援、御協力を賜りますようお願いいたします。

今期の御寄贈(平成26年3月～12月)

- 青嶺俳句会―『青嶺季語別句集Ⅲ』二冊
- 青森県―『青森県史 資料編 近現代6』
- 青森県歌人懇話会―『創立六十周年記念誌 十年のあゆみ』
- 青森県高等学校文化連盟文芸部―『あすなろ』第25号 他雑誌三冊
- 青森県退職高等学校長会(さつこう会)―『さつき会たより』第28号
- 青森県版画会―『青森版画』第112号
- 青森県文芸協会―成田千空関係資料十三点 他図書四十五冊・雑誌二十九冊
- 青森県立鯉ヶ沢高等学校―『美し地に 永久の栄えを』
- 青森県立美術館―DVD「女生徒」 他図書三冊
- 青森市総務部総務課市史編さん室―『新青森市史 通史編第三巻 近代』他図書三冊
- 青森文芸出版―『文芸あおもり』終刊号 他図書一冊・雑誌一冊
- 新谷博―成田千空関係資料二十一点 他図書一冊
- 安藤晴美―『夢のせて』
- 家の光協会―『第13回家の光 読書エッセイ 入選作品集』
- 石井頼子―『宇賀田次助のこと』
- 石川啄木記念館―『石川啄木記念館 展示ガイド』
- 石田正―文芸団体・北の会関連資料三十三点
- IZU PHOTO MUSEUM―『詩・文・写真集

津軽

- 市川市文学ミュージアム―『神作光一のひととく和歌の世界』
- 一戸晃―一戸謙三関係資料十五点 他図書六冊
- 一茶記念館―『小林一茶百八十八回忌 全国俳句大会作品集』
- 井上健蔵―『無料の朝』
- 今井桃青―『石坂洋次郎忌 献句 山脈忌 名句集』
- 今別町役場―『青春の津軽海峡』
- 今谷弘―『名家百人十句』大塚甲山部分コピー
- いわき市立草野心平記念文学館―『草野心平の詩 富士山編』
- 岩崎潤子―『国原』創刊号 他雑誌二五七冊
- 岩崎雪洲―『見上げれば』
- 上野重光―『YASUION』30号
- 蝦名石蔵―『句集 風姿』
- 遠藤周作文学館―『遠藤周作と歴史小説』
- 大田区立郷土博物館『馬込文士村』あの頃、馬込は笑いに充ちていた―
- 小笠原茂介―『午前』第6号
- 岡村敬二―『戦前期「外地」で活動した図書館員に関する総合的研究』
- かごしま近代文学館―『装い―向田邦子のおしゃれ術』
- 加藤忠昌―詩誌「風」第11号
- 神奈川文学振興会―『須賀敦子の世界展』他図書六冊
- 金本太宰会―会誌「馬禿」第13集 他雑誌二冊
- 鎌倉文学館―『愛とブンガク』他図書一冊
- 鎌田紳爾―『ふたりの修ちゃん』
- カラーズプランニング―『DREAMS 3776』No.011
- がらんどう―DVD「桜井哲夫の道・詩」
- 川島晋一―『映画監督 川島雄三 雄然 五十回忌法要記念誌』二冊
- 川村慶子―『句集 冬のオホーツク』他図書

一冊

- 企画集団ぷりずむ―『あおもり草子』通巻二二五号
- 菊池忠―『七里長浜さめざめと』他図書一冊
- 北九州市立文学館―『宙のかげらたち―詩人宗左近展―』
- 北九州市立松本清張記念館―『伯爵夫人ミツコ 激動のヨーロッパに咲いた華』
- 北村圭一―北村小松・北村信正旧蔵レコード三七一点
- 北見有利―『エノケン喜劇のドラマツルギー』
- 木附沢麦青―『俳句』第63巻第12号
- 草野力丸―成田千空原稿「序」
- 工藤克巳―『工藤克巳俳句集』
- 工藤青夏―『珈琲時間』Ⅱ 他図書一冊
- 工藤正廣―『奥の細道』第1号
- 熊本学園大学出版会―『ロシア・モダニズム』を生きたる』
- 熊本近代文学館友の会―文芸誌『湧水』臨時増刊号
- 群馬県立土屋文明記念文学館―『新島襄生誕170年記念 襄と八重の上州』他図書三冊・雑誌一冊
- 高知県立文学館―『土佐文学さんぽ』他図書一冊
- こおりやま文学の森資料館―『高山樗牛』
- 小島弘子―『暖かい陽射し』
- 五所川原俳句会―『県下俳句大会入選句集』
- さいたま文学館―『文芸埼玉』第91号 他図書一冊
- 斉藤純子―『合同歌集「歌の杜」』
- 桜庭和浩―『葛西善蔵小説集 第二巻』他図書一冊
- 笹沼正悦―『とうおう世相川柳掲載200回の軌跡』二冊
- サトウユウジ―『あおもり草子』通巻二二三号
- 佐藤吉一―『詩人・白鳥省吾』
- さわらび短歌会―『さわらび』創刊号 二冊
- 三栄書房―『書を知る2』
- 産経新聞社事業局―『第二十回与謝野晶子短歌文学賞選歌集』 他図書一冊
- 静岡県文化・観光部文化政策課―『伊豆文学散歩』
- 柴橋伴夫―『太陽を掴んだ男 岡本太郎』
- 渋谷聡―『詩集 ひとりぼっちのおとうさん』二冊
- 渋谷伯龍―『お国ことばで川柳 苺』他図書十冊
- 清水義和―『寺山修司研究』第七号 他図書一冊
- 城西川柳愛好会―『あしあと』二冊
- 詩霊の会―『詩霊』創刊号
- 新宿区立新宿歴史博物館―『林美美子資料目録』
- 鈴木喜代春―自筆原稿二十八点 他図書四冊
- 仙台文学館―『石川啄木の世界』他図書一冊
- 川内まごころ文学館―『要覧 川内まごころ文学館10年の歩み』
- 高市順一郎―『勾玉』第3号
- 高橋千恵―『高橋千恵句集 好きさだけ』二冊
- 鬘の会―『鬘』第53号 他図書一冊
- 館田勝弘―『「懸葵」と青森県の俳人たち』他図書一冊
- 短歌結社「草の会」―平成25年度歌会詠草集『合歓の木』二冊
- 中央公論新社―『日本ミステリー小説史』
- ちゅうでん教育振興財団―『いっしょにアンペー』
- 調布市武者小路実篤記念館―『美の宝庫』他図書一冊
- 津島園子―太宰治関係資料八点
- 対馬智恵子―『樹下往来』二冊
- 東奥日報社―『東奥文芸叢書』三十六冊 他図書四冊・雑誌一冊
- 藤村記念館―『馬籠八景…古今の対話』
- 徳島県立文学書道館―『瀬戸内寂聴 文学

- 赤瀬川原平「文学と美術の多面体」展」
○松本皎一「俳星」通巻第1131号
○松山市立子規記念博物館「子規と「小日本」——新聞界の旋風——」他図書一冊
○三浦榮一「流れる五戸川」続22他図書一冊
○三浦康久「サントラ版「忍ぶ川」レコード他雑誌九冊
○三上強二「鈴木喜代春関係資料二点」他図書十二冊・雑誌一冊
○三鷹市山本有三記念館「『大正ロマンの恋と文』」
○未知谷「小沼丹全集バンフレット」
○宮沢賢治学会イーハートブセンター「『宮沢賢治研究Annual』第二十四号」
○森英一「ねぶくとさ」
○八木田順峰「『詩歌文芸誌 なんぶ』4 他図書三十九冊・雑誌七十三冊
○山梨県立文学館「『村岡花子展』他図書一冊
○山梨文学賞実行委員会「『山を祭る人々』」
○山本晶「『ヘンリー・ソー』研究論集」第40号
○山本隆悦「『映画監督 川島雄三シンポジウム』他雑誌六冊
○横山勉「『詩集 雪の重さ』二冊
○吉田千嘉子「『吉田千嘉子句集 一滴の』二二冊
○麗人社「『美術屋・百兵衛』第31号
○和田正彦「『沢田としき』いのちのリレー実施報告書』二冊
- 継続的な御寄贈**
- 會津八一記念館「『雁魚來往』二冊」
○青嶺俳句会「『青嶺』」
○青森アララギ会「『青森アララギ』」
○青森県歌人懇話会「『青森県歌集』」
○青森県観光連盟「『あおもり教育旅行ガイドブック2014』」

○青森県教育厚生会―「三潮」
○青森県郷土作家研究会―「郷土作家研究」
○青森県現代俳句協会―「青森県現代俳句年鑑」
○青森県詩人連盟―「県詩集 青森」
○青森県川柳社―「ねぶた」
○青森県長寿社会振興センター―「あすなろ俱楽部」
○青森県俳句懇話会―「新青森県句集」
○青森古今短歌会―「青森古今」
○青森文学会―「青森文学」
○青森ペンクラブ―「北の邊」
○井上康―「みちのく春秋」
○井上靖記念文化財団―「伝書鳩」
○井上靖研究会―「井上靖研究」
○大久保健峰―「川柳うまっこ」
○小笠原茂介―「第三次 ERA」
○大佛次郎記念館―「おさらぎ選書」
○小田桐優子―「俳句鼎 妙」
○鬼―「鬼」
○小山正見―「感泣亭秋報」
○海光発行所―同人誌「海光」
○飾画の会―「飾画」
○金沢文化振興財団―「研究紀要」
○北九州市立松本清張記念館―「松本清張研究 第十五号」
○北の会―「きたのやかた」
○北の街社―「北の街」
○木村美映―季刊詩歌誌「美映」
○陸羯南会―「陸羯南会誌」
○国原社―「国原」
○黒艦隊―「俳句同人誌 黒艦隊」
○群系の会―「群系」
○薫風発行所―「薫風」
○群馬県立土屋文明記念文学館―「群馬県立土屋文明記念文学館 紀要『風』」
○勁草社―「勁草」
○月刊弘前編集室―「月刊『弘前』」
○越谷市立図書館 野口富士男文庫―「野口富士男文庫 第十六号」

○五所川原俳句会―「五所川原俳句会句会報」
○小山弘明―「光太郎資料41」「光太郎資料42」
○斎藤茂吉記念館―「斎藤茂吉記念歌集 第四十集」
○朔社―「朔」
○此岸俳句会―俳誌「此岸」季刊誌 此岸」
○紫明の会―「紫明」
○下北文化社―「しもきた文化」
○渋柿園俳句会―「渋柿園」
○書肆 北奥舎―「北奥氣園」
○真朱の会―「真朱」
○雪天俳句会―「雪天句集 第8集」「雪天」
○全国文学館協議会―「全国文学館協議会紀要」
○川柳「風の会」―「風紋」
○川柳触光舎―「触光」
○川柳ゼミ 青い実の会―「青い実」
○川柳塔みちのく―「川柳塔みちのく」
○川柳ひらない吟社―「川柳ひらない」
○外海吟社―「外海」
○泰斗舎―「あおり芸術鑑賞友の会文化情報誌 びーち」
○高田寄生木―「北貌」
○高山市生涯学習課―「高山市近代文学館調査・研究報告書」
○たかな発行―「たかな」
○「太宰治スタディーズ」の会―「太宰治スタディーズ」
○潮音社―「潮音」
○童子津軽句会―「津軽通信」
○胴乱詩社―「胴乱」
○徳島県立文学書道館―「水脈」
○十和田かばちえっば川柳吟社―「川柳かばちえっば」
○中原中也記念館―「中原中也研究第十九号」
○中村キネ―「北苑ノート」
○成田本店―「新刊展望」「青春と読書」「図書 波」
○新美南吉記念館―「研究紀要」
○仁科源一―「斜坑」

- 日本近代文学館―「日本近代文学館年誌」
- 日本現代詩歌文学館―「日本現代詩歌研究」
- 日本民主主義文学会弘前支部―「弘前民主文学」
- 野辺地川柳社―「川柳常夜燈」
- 俳人協会―「俳句文学館紀要」
- haslamato―「本のパーキング」
- 八甲田川柳社―「川柳八甲田」
- 波濤短歌会青森支部―「波濤青森」
- はまなす発行所―「はまなす」
- 帆風美術館―「風」
- 萬緑青森支部―「未来」
- 萬緑発行所―「萬緑」
- 姫路文学館―「姫路文学館紀要」
- 弘前詩塾―「弘前詩塾」
- 弘前川柳社―「川柳」林報」
- 弘前大学国語国文学会―「弘前大学国語国文学」
- 弘前潮音会―「すべすべ」
- 弘前文学学校―「文学いちば」
- 弘前ペンクラブ―「弘前ペンクラブニュース」
- 福田正夫詩の会―「焰」
- ふだん記津軽グループ―「ふだん記津軽」
- 文藝軌道の会―「文藝軌道」
- 北狄社―「北狄」
- 前橋文学館―「前橋文学館研究紀要」
- 松丘保養園慰安会―「甲田の裾」
- 山田尚―「亜土 第二次」
- 山梨県立文学館―「資料と研究」
- 悠短歌会―「悠」
- 「樸」俳句会―「樸」
- 立教女学院短期大学図書館―「こうふくのクレン」
- 瑠璃の会―「瑠璃」
- 若菜の会―「若菜」

《館報》

- 青森県総合社会教育センター
- 荒川区地域文化スポーツ部複合施設準備室
- 有島記念館
- 石川近代文学館
- 石川啄木記念館
- 泉鏡花記念館
- 一茶記念館
- 井上靖記念館
- いわき市立草野心平記念文学館
- 岩手県立埋蔵文化財センター
- 大阪国際児童文学振興財団
- 大島博光記念館
- 大原富枝研究会
- 学習院大学史料館
- かごしま近代文学館・メルヘン館
- 神奈川文学振興会
- 金沢文芸館
- 軽井沢高原文庫
- 川西町フレンドリープラザ
- 北九州市立文学館
- 北九州市立松本清張記念館
- 虚子記念文学館
- 熊本近代文学館
- 高知県立文学館
- こおりやま文学の森資料館
- 高志の国文学館
- 埼玉文芸家集団
- 坂の上の雲ミュージアム
- 佐々木基一全集刊行会
- 佐藤春夫記念館
- 世田谷文学館
- せたがや文化財団
- 全国文学館協議会
- 仙台文学館
- 川内まごころ文学館
- 台東区立中央図書館 池波正太郎記念文庫
- 鷹山宇一記念美術館友の会
- 調布市武者小路実篤記念館

- 壺井栄文学館
 - 東京都江戸東京博物館
 - 藤村記念館
 - 東北大学史料館
 - 東北大学総合学術博物館
 - 徳島県立文学書道館
 - 十和田市立新渡戸記念館
 - 中原中也記念館
 - 新美南吉生誕100年記念事業実行委員会
 - 日本近代文学館
 - 日本現代詩歌文学館
 - 俳人協会
 - 俳人協会青森県支部
 - 八戸市博物館
 - 原阿佐緒記念館
 - 姫路文学館
 - 弘前市立郷土文学館
 - 福岡市文学館
 - 文京区立森鷗外記念館
 - 北海道立文学館
 - 前橋文学館
 - 松山市立子規記念博物館
 - 三浦綾子記念文学館
 - 三鷹市山本有三記念館
 - 宮沢賢治学会イーハトーブセンター
 - 宮柊二記念館
 - 棟方志功記念館
 - 室生犀星記念館
 - 盛岡てがみ館
 - 山梨県立文学館
 - 吉川英治国民文化振興会
- (寄贈者名は五十音順で敬称を略しました。表記は資料に従って掲載いたしました。)



太宰治 句帖「亀の子」(小館善四郎旧蔵)



増田手古奈 扇子「蓼仕事してゐる音のなつかしく」

「日曜は…午後の朗読会へ」実施

「大人になった今だからわかる本の
味わいがある——日曜日の午後、文学
館の明るいロビーでソファに腰をおろ
し、作品に耳をかたむけませんか」

今年度は開館二十年を記念して、常
設展示されている十三人の作家たちを
取り上げました。解説員による朗読と
解説の楽しいひとときは、大好評でし
た。最終回の北村小松「マダムと女
房」は、小松のシナリオを再構成し、
演劇のスタイルでお楽しみいただきま
した。



第11回『マダムと女房』

- ①5月25日(日) 『葛西善蔵』～『権の若葉』
②6月15日(日) 『太宰治』～『満願』・『人間失格』他
③7月6日(日) 『今官一』と長部日出雄』～『星の下のクワ
レット』・『津軽じょんから節』
④7月20日(日) 『寺山修司』～『競馬への望郷』・十代の俳句
⑤8月10日(日) 『三浦哲郎①』～『ユタと不思議な仲間たち』
⑥9月7日(日) 『三浦哲郎②』～『忍ぶ川』・『じねんじょ』

館務日誌

- ⑦9月28日(日) 「佐藤紅緑」～『あ、玉杯に花うけて』
⑧10月19日(日) 「高木恭造と福士幸次郎」～『まるめる』・『太陽の子』・『展望』
⑨11月2日(日) 「石坂洋次郎」～『石中先生行状記』
⑩11月23日(日) 「北島八穂・秋田雨雀」～『はじめに来る人』・『骸骨の舞跳』他
⑪12月7日(日) 「北村小松」～『マダムと女房』
- 4月16日 寿大学・女性大学合同入学式第二部座
談会(竹浪主査)参加者520名
4月17日 野沢省悟氏来館
4月22日 青森ペンクラブ(三上強二会長他3名)
来館
4月26日 企画展「棟方志功と青森の文学」
(6月8日)
5月1日 野沢秀昭氏(青森県児童文学研究会会
長)、三野亜沙子氏来館
5月2日 鈴木廣氏(青森県版画会代表)、木村
捷則氏来館
5月8日 青森中央短期大学附属第三幼稚園22名
見学
5月11日 川口俊子氏(有明淑の縁者)、野澤秀昭
氏(青森県児童文学研究会会長)来館
5月18日 日曜講座(竹浪主査)参加者36名
棟方志功御遺族(石井頼子氏他1名)来
館
5月20日 青森中央短期大学附属第二幼稚園30名
見学
5月21日 黒石市立中部公民館56名見学。武田公
平氏(棟方志功記念館館長補佐)他1名
来館。市町村立図書館等職員研修(初
任者研修①)参加者21名
5月23日 高木保氏来館。浦田保育園44名見学
6月3日 福士光生氏(萬緑青森支部長)、石崎
志多氏(萬緑青森支部事務局長)来館
6月4日 青森市立浜田小学校5名見学
6月6日 デイサービスこもれび9名見学
教育委員会新採用職員訪問10名見学
6月8日 出前講座(青森県高等学校文化連盟文
芸部・西谷主査)参加者40名
蝦名幸一氏(椿館代表取締役)、小熊健
氏来館
6月11日 出前講座(市町村図書館等職員研修・
伊藤総括主幹)
6月12日 秋田市立四ツ小屋小学校18名見学
6月15日 スポット展示「太宰治 新収蔵の書と
写真」(7月1日)
6月16日 外ヶ浜町立蟹田小学校22名見学
- 6月19日 津島園子氏、二宮善宏氏(元平凡社編
集者)来館
6月21日 八木田順峰氏(なんぶ短歌会会長)来館
6月24日 文学資料調査員会議(10名出席)
6月27日 青森中央短期大学10名見学
7月1日 造道中学校6名見学
7月2日 インターシップ(青森県第一高等養
護学校)1名
7月8日 青森市立南中学校13名、青森シニアカ
レッジ51名見学
7月9日 木下義氏(金木太宰会会長)来館。佃中
学校4名、青森県高教研図書部会図
書委員研修大会参加者34名見学
出前講座(青森県高教研図書部会図
書委員研修大会・伊藤総括主幹)参加
者20名
7月11日 福村忠夫氏来館
7月12日 特別展「三浦哲郎」開会式(テーブカッ
ト・月館法弘館長、音喜多勝氏、工藤
英壽氏)参加者19名
7月13日 出前講座(青森高校・竹浪主査)参加者
10名
7月16日 青森県近代文学館評議委員会
シニアカレッジ32名見学
7月22日 青森県高校14名見学
7月25日 特別展「三浦哲郎」文学講座1(講演:
富岡一郎氏 朗読:鳴海征子氏)参
加者68名。久慈きみ代氏来館
7月27日 青森北高校8名見学
7月29日 インターシップ(青森南高等学校)2名
小田島一弘氏(鎌倉文学館副館長)来館
8月1日 三浦哲郎御遺族(三浦徳子氏他4名)、
宮忠氏、鷹屋敷雄太郎氏、大上芳孝氏
来館
8月3日 文学講座2 参加者72名(講演:森林
康氏 鼎談:米田省三氏、鶴引洋一
氏、サトウユウジ氏、立花京子氏、近
藤洋子氏、三浦康久氏来館
8月17日 板柳子ども司書講座8名見学、出前講
座(青森県高等学校教育研究会国語部
会・西谷主査)参加者120人
8月20日 八戸市鶴田大学7名見学
8月29日 日曜講座(伊藤総括主幹)参加者27名
8月31日 北條勝貴氏他7名来館
9月3日 インターシップ(青森中央高校)4名
9月5日 青森市立堤小学校3名、青森市立荒川
小学校42名見学
9月10日 スポット展示「佐藤紅緑」句と筆跡」
(9月30日)
9月13日 かなぎ元気倶楽部(部長今幸樹氏他4
名)見学
9月18日 野辺地子ども司書他10名見学
9月20日 図書館探検隊(子ども)の読書活動推進
県民大会(19名見学)
9月24日 中央文化体育園14名見学
10月4日 派遣社会教育主事合同研修20名見学
10月8日 企画展「成田千空」(11月24日)成田
千空御遺族(成田市子氏他3名)来館
10月10日 山内ひろ子氏来館
10月11日
10月12日
- 10月13日 日野口晃氏来館
10月14日 出前講座(荒川寿大学・伊藤総括主幹)
参加者14名
10月17日 青森南高校4名見学
10月18日 傳馬義澄氏他8名見学
10月19日 柔道整復師10名見学
10月22日 青森盲学校4名見学
10月26日 草野九氏来館
11月2日 増田木巨子御遺族(増田尚紀氏他3名)
来館
11月4日 木附沢青氏他1名来館
11月5日 十和田市立深持小学校47名見学
11月6日 對馬鳴月御遺族(福多郁氏他1名)来館
11月8日 青森市立平川児童館25名見学
11月9日 日曜講座(西谷主査)参加者64名
11月10日 菊池忠氏(立俣武多の館館長)来館。デ
イサービスふれあい温泉15名、全国大
学国語文学会24名、青森県立図書館
協議会4名見学
11月13日 鯉ヶ沢町立西海小学校25名見学
11月14日 出前講座(西部寿大学・竹浪主査)参加
者30名
11月15日 十和田市子ども司書23名見学
11月16日 青森市立泉川小学校親子10名見学
11月18日 青森街てく14名見学
11月20日 三上強二氏来館
11月22日 雪天俳句会(新谷ひろし主宰他3名)来館
11月23日 渋谷聡氏来館
11月24日 成田千空御遺族(荒谷信子氏他1名)、
佐々木達司氏、佐々木進也氏、櫻庭利
弘氏来館
12月6日 スポット展示 北村小松「コマツの青
春」(12月24日)
1月13日 出前講座(大野女性大学、大学院講座・
西谷主査)参加者9名
1月17日 「開館20年記念名品展」(3月15日)
1月23日 木村祐輔氏(キハラ会長)来館
2月27日 全国文学館協議会共同展示「3・11
文学館からのメッセージ」木村友祐の
中の震災と復興「イサの記」(聖地
CS) (3月31日)
3月1日 第13回青森県近代文学館柳大会・参
加者89名
3月8日 日曜講座(館田勝弘・弘前市立郷土文
学館企画展専門官)参加者34名
木村友祐氏御家族(木村彌三郎氏他6
名)、三浦文学顕彰協議会(宮忠氏他3
名)、櫻庭和浩氏、一戸晃氏来館

青森県近代文学館報 第三十二号

発行日 平成二十七年三月十六日

編集発行 青森県近代文学館「青森県立図書館内」

〒030-0184 青森市荒川字藤戸一八九七

電話 〇一七三九二五七五

<http://www.jlib.pref.aomori.jp/top/museum/>